

聖書：使徒言行録22:1-5

讃美歌：235（1, 3節）

1. 前回のおさらい

- *新約時代の宗教的状况 「律法主義」の時代 「律法遵守で救いが得られる」
宗教が「息苦しさ」を与える 律法学者・ファリサイ派はそんな社会の「監視役」
- *イエスの宣教のユニークさ → 律法からの自由 「選民・イスラエル」の枠をも超える 「大切なのは愛」
律法学者・ファリサイ派との対立 → 十字架 → そのイエスを「メシヤ」と信じる人々 = クリスチャン
- *パウロはファリサイ派の律法学者 クリスチャンを迫害する側 そのパウロが最大の伝道者（回心）
- *「回心」と「改心」

2. パウロの生い立ち

- *パレスチナ育ちのユダヤ人と、外国育ちのユダヤ人 同じユダヤ人でも異なる心象
- *使徒言行録22:1～の記述（著者・ルカの視点 演出・脚色）
- *キリキアのタルソス出身（巻末地図『パウロの伝道旅行1』トルコ半島の根元、海側に「タルソス」）

3. ディアスポラのユダヤ人としてのパウロ

- *ディアスポラ（離散）大量に発生したのはユダヤ戦争（A.D. 66-70）→ 世界中に散らばり、迫害される
- *紀元前からそのような存在はあった パウロの一家もその中の一員
- *ギリシャ語を自由に使いこなせたパウロ（当然）むしろ注目すべきはヘブライ語・アラム語もできたこと
- *ディアスポラのユダヤ人の特色 現地の風習・ならわしには馴染まず（多神教×一神教○）
現地の人からは「まつろわぬ民」 弾圧・迫害の対象
- *パレスチナのユダヤ人と、ディアスポラのユダヤ人の違い（LAの日系人と、京都人の違い）
ギリシャ語しか話せない人も... → パウロはヘブライ語・アラム語 堪能 「ガマリエルの弟子」→？
- *「ヘブライ人の中のヘブライ人」（フィリピ3:5b）本国のユダヤ人以上に伝統に忠実（誇り）
その誇りが「塵・あくた（ふん土）」のように感じる体験 = パウロの回心

4. 「ガマリエルの弟子」（使徒言行録22:3）の信ぴょう性

- *ガマリエル = 使徒言行録5:34 クリスチャンへの迫害を「放っておくがよい」とアドバイス
- *パウロ自身の手紙の中に記述なし フィリピ3章の自分の来し方についての言葉に含まれていない

5. パウロがクリスチャンを迫害した理由

- *「熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者」（使徒3:5b）
- *律法遵守では誰にもひけを取らない → その忠実度が、そのままキリスト者への迫害に...
- *律法遵守を呼びかけるクリスチャンも... → 迫害の対象外（後にパウロの論敵）
- *ステファノー派 「律法からの自由」の主張 ← パウロの迫害の理由・根拠

次回の日程は調整中です。